２．２．１　携帯電話所持の低年齢化

2005 年の今、携帯電話は若者の、いや日本人の必ず持っているものの一つになりつつある。携帯電話は一家に一台を通り越したのは昔で、今は、筆者の知る限り、高校生以上の学生ではほぼその所有率は 100 パーセントに近いものになっている。携帯電話の所有の波は、だんだんと低年齢化してきた。中学生においても、ほしいもののナンバーワンとなり、小学生においても、子どもの「ほしい」という言葉に、また子どもの安全を考えてと、子どもに買い与えている親も多い。昨年の筆者が行った調査では、中学生で４割の生徒が、小学生で１割の児童が携帯電話を持っているという結果が出た。

近年、小学生、中学生をねらった犯罪も多く、親としては、子どもの安全のために、という理由も多い。また、子どもといつでもどこでも連絡が取れるという安心感のため、さらには、公衆電話が減ってきていることもあり、塾などの迎えの連絡などという理由もある。いずれにしても、親にとっては子どもを管理するには絶好の道具である。小学生段階ぐらいまでは、親の願いと子どもの携帯電話の利用の意識にはさほど大きな違いはない。調査においても、通話料金が突出するものはなく、また、ほとんどの通話の相手も親や親戚などとなっている。

ところが子どもが中学生ぐらいともなると、その利用の様相ががらりと変化してくる。通話の相手が親ではなく、友だちになる。そして、電話という通話する道具から、メールを打つインターネット端末へと用途が変容してくるのである。

中学生・高校生のいわゆる思春期は、自己を認識し、自己形成に大きなエネルギーが使われる時期である。性の意識が芽生え、他人へ働きかけたり、自己主張や自己表現をしたりと、そのような意識が高まる時期である。

そのような意気多感な時期に、高校生たちの心をとらえたのが、ポケットベルであった。発売当初のポケットベル（ポケベル）は、連絡がほしい時、音がなるだけのものであったが、1993 年頃よりメッセージが送れるポケベルが出現し、若者の間にポケベルが流行し始めた。比較的料金が安いこともあり、ポケットベルを持つ友だち（ベル友）にメッセージを送るために、公衆電話に行列ができるという時代があった。これも携帯電話が普及し始めることによって、衰退し、現在ではサービスを終了している。離れた友達へ短い言葉でメッセージを送り、また、その返事が自分のポケベルにもどってくることで、コミュニケーションを図っていたのである。携帯電話も 1990 年代には少しずつ一般に普及はしてきたが、まだまだ基本料金、通話料金も高く、サービスエリアも限られていたため、誰でも持つというグッズにはならなかった。

1990 年代も終盤を迎えようとしていた時、ショートメールという機能が携帯電話に加わった。通話だけの電話から、短いながらもメールが打てるようになったわけである。これ

が、ポケベル時代の次の世代に高校生に大流行になったわけである。

その後ＮＴＴＤＯＣＯＭＯよりＩモードの携帯電話機が発売された。これががっちりと高校生を中心とした子どもたちに受け入れられたのである。さらに、携帯各社もメールやインターネットなどパケット料金の一定額性、学生割引、家族割引などの料金値下げを行い、今では高校生たちの必需品とまでなったのである。

この調査からもわかるが、中学生や高校生の子どもたちが主に利用しているのは、通話機能ではなく、メール機能である。筆者自身もどちらかというと電話よりもメールの方がありがたい。なぜかというと、相手の今の状態を気にすることなく、情報を送ることができるというところである。特に携帯電話であるとこちらから電話をかける時、「今、授業中かな」、「勉強中かな。」、「車の運転中でないかな。」などと、相手のことを考えてしまう。また逆の立場で、自分が運転中だと、出ないにしても気になって着信を見るということいなってしまう。メールだと、着信はわかるが、用件中だと後で読むことにもなるし、場合によっては、机の下でこっそりと見ることができるかもしれない。今すぐの用事以外には、実に便利な手段であるわけである。

メールで交わされる内容はたわいもないものであろうが、子どもたちにとっては、離れていても、心がつながっているという安心感があるのである。

電話料金は保護者持ちということで、子どもたちは、親と携帯電話利用の約束をしながらも、彼ら、彼女らにとって決して手放せないグッズになっているのである。

２．２．２　子どもの安全を守る携帯電話の新しい利用法

その一方、近年では、どこでもつながるという利点から、社会の不安さゆえに生かされるサービスが全国各地で研究され、提供されている。

AU には、安心ナビというサービスがある。それは、子どもがいる場所を確認できる。また、設定した場所を離れるとメールが送られる。設定した場所に近づくとメールが送られるというものである。

また、阪急電鉄など関西の私鉄は、IC カードを利用する定期券をもった小、中学生を対象に子どもが改札を通った時、親の携帯電話にメールを送るサービス実験を開始した。この実験では、あらかじめ登録した自宅最寄駅と塾や学校のある駅の改札を通過すると、行き帰りの４回親にメールが届く仕組みである。９７％の親が安心できるという回答を得たという。

大阪・吹田市では、府をはじめ産官学４８団体でつくる「大阪安全・安心まちづくり支援ＩＣＴ活用協議会」が主体となって IC タグを使って生徒の校門通過状況を保護者にメールで知らせる実験を開始した。この実験では、IC タグのついた防犯ブザーを希望する生徒に貸し出し、校門に設置されたアンテナにより生徒の通過を検知し、親に知らせるというものである。また、学校でも生徒の登校状況、またタグをつけていない者の校地への侵入がわかるという。

また、不審者の情報が、関係機関から保護者の携帯にメールで届くというサービスも全国各地で取り組まれている。予め、メールアドレスを登録すると、その地域の不審者情報が携帯メールに送られてくる。親は、子どもを迎えに行くとか、通りまで出るとか、警戒感を高めることができるようになってきている。

どれも携帯電話の機動性を生かしたすばらしい取り組みであろう。「なんでここまでしなきゃならない世の中になってしまったのだろう。」という気持ちもあるが、自分の子どもの身の安全を図るというためには、必要なことなのであろう。だが、子どもの安全性を守るためとは言え、いつでも監視されている子どもの気持ちも察していくということも忘れてはならない。